埼玉県立
歴史と民俗の博物館

彩の国埼玉県

THE MUSEUM

2024.2 第 51･52 合併号

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

令和 5 年 10 月 14 日リニューアルオープン当日

･お待たせしました！リニューアル･オープン記念イベントを開催 ・・・・・・・・1
･イベント開催チームの取組について ・・・・・・・・3
･情報発信チームの取組について ・・・・・・・・5
･館内環境整備チームの取組について ・・・・・・・・7
･出張ものづくり体験 ・・・・・・・・9
･出張展示 in 深谷「書画から見よう 栄一と惇忠」事業報告 ・・・・・・・・11
･常設展示室第 10 室のリニューアルについて ・・・・・・・・12
･常設展示室第 1･2 室特集展示新設･パネル更新について ・・・・・・・・15
･資料保存の環境の改善について ・・・・・・・・19
･昭和の原っぱメンテナンス ・・・・・・・・21

お待たせしました！
リニューアル・オープン記念イベントを開催
―10月14日(土)・15日(日)―

当館は昨年の 12 月 5 日から施設改修工事のため閉館していましたが、無事に工事も終了し、10 月 14 日（土）に再開館しました。それを記念して、当日１４日と翌日１５日にオープン記念イベントを開催しましたので、ご報告します。

まず、オープン初日の 14 日（土）には、加須市玉敷神社で奉納される、国指定重要無形民俗文化財「玉敷神社神楽」の公演を、神楽保存会の方々にお願いしました。玉敷神社神楽の特徴は、様式的な舞を中心としながらも、演劇的な要素も取り入れているところです。当日の演目は、この神楽の特徴をよく表す、鹿島・香取の連れ舞、戸隠明神の舞、恵比寿の舞、山めぐりの４座でした。この日は朝から快晴で、まさに神楽日和。にぎやかなお囃子や優雅で勇壮な舞、そして滑稽な恵比寿の舞などに、野外ステージを囲んだ 200 人以上の方々が酔いしれた 40 分でした。

15 日（日）には、埼玉大学邦楽部琴吹会のみなさんに、箏・三味線・尺八によるアンサンブルをお願いしました。歴史を扱う博物館らしく、和のテイストで華やかに皆様をお迎えしようと企画しました。普段は広々とした空間のエントランスに、和楽器の優雅な音色が響き渡りました。

現代風曲や和楽器用にアレンジした曲など、邦楽という観念を超えた新鮮な調べが胸を打つ演奏会となりました。お客様も満足しながらじっくりと聴き入っていらっしゃいました。

朝から土砂降りの雨にもかかわらず、多くの方にお集まりいただき、本当にありがとうございました。

玉敷神社神楽　恵比寿の舞

埼玉大学琴吹会による演奏

多くの方にご覧いただきました

箏と三味線のデュエット

また、両日とも、職員による博物館裏方探検隊スペシャルと展示リニューアル解説ツアーを実施しました。

博物館裏方探検隊スペシャルは、通常毎週土曜日に行っている博物館裏方探検隊に加え、今回どのような工事が行われたのかを拡大バージョンで皆様にご紹介しました。普段は見られない空調室や消火設備などもご覧いただきました。

展示リニューアル解説ツアーは、今回の工事期間中に常設展示室の第10室（民俗展示室）の全面リニューアルと、第1、2室（考古展示室）の一部リニューアルを行ったので、オープニングにあわせてご案内をしました。

オープニング記念イベントは、お蔭様をもちまして盛況のうちに終えることができました。10か月も休館していたので、世間から忘れられているのではないかと心配していましたが、2日間で1,000人を超える入館者をお迎えしました。お客様からは、再開館を待ちわびていた、また展示が見られるようになってよかった、というお話も伺いました。これからも、皆様のご期待に沿えるような、充実した事業を進めてまいりますので、今後とも当館をよろしくお願いいたします。

最後に、快くイベントにご出演いただいた、玉敷神社神楽保存会及び埼玉大学邦楽部琴吹会の皆様、そしてご来館いただいた多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

（副館長　岡本健一）

博物館裏方探検隊スペシャル 空調機械室

展示リニューアル解説ツアー 第２室

博物館裏方探検隊スペシャル 収蔵庫

展示リニューアル解説ツアー 第10室

イベント開催チームの取組について

1　出張講座 あなたの街にも「れきみん埼玉」

当館では博物館活動の一環として、学芸員の専門を生かした各種講座を実施してきました。工事休館中は博物館内での活動ができないため、館外での出張講座を行いました。

今回の出張講座を企画するにあたり、学芸員全員が登壇すること、学芸員それぞれが話すテーマを自由に設定することとしました。当館には２３人の学芸員がおり、専門も様々です。このような規模で実施する館外での連続講座は、当館では初の試みでした。博物館内の講座はテーマに興味のある方にお越しいただけますが、今回のように、館外で、テーマが幅広い連続講座に興味をもっていただけるのかー。会場や実施方法について検討を重ね、開催は令和５年５月から８月まで、おおよそ１か月に１回のペースで５回の開催とし、うち３回は熊谷と久喜の県立図書館、２回はウェスタ川越が会場となりました。

会場の熊谷・久喜の県立図書館２館には、広報・参加者募集、講座実施においてもご協力いただきました。また図書館での資料展やミニ展示を講座内容と共通のテーマとして、学芸員が展示に協力する形での事業連携も実現しました。

１つの講座の時間は 45 分、午前、午後それぞれ 2～3 講座ずつでの実施とし、申込も講座ごとではなく、午前の回、午後の回に分けての募集としました。

◆実施日と講座のテーマ

第１回　5/27（土）　県立久喜図書館

①「描かれた平家物語―義経、直実、敦盛―」
②「博物館における資料の保存と修理」
③「埼玉の隠れた偉人 清水卯三郎」
④「古文書からみる埼玉のお寺」

第２回　6/18（日）　県立熊谷図書館

①「モノの分布から見る埼玉の古墳時代」
②「古代埼玉の渡来系氏族」
③「小鹿野町法養寺薬師堂の「落書き」」

第３回　7/26（水）ウェスタ川越

①「お茶づくりの多様化にみる生産者の戦略
－狭山茶生産を事例として－」
②「ごはんＶＳうどん―埼玉の郷土色を調査してみた―」
③「博物館収蔵資料の紹介―考古学者柴田常恵のコレクション―」
④「埼玉の近世窯」
⑤「文化財とＸ線と―稲荷山鉄剣銘文発見あれこれ―」

第４回　8/1（火）　県立久喜図書館

①「ハニワってな～に？」
②「おばけ図鑑 Part２」

第５回　8/25（金）ウェスタ川越

①「埼玉と鉄道－川越に鉄道が通った日－」
②「江戸と水車～江戸と周辺農村の関係性～」
③「ふつうの家からわかること」
④「埼玉の文化財建造物」

出張講座　会場：県立熊谷図書館
（モノの分布から見る埼玉の古墳時代）

５回の講座に参加していただいた方は、のべ３０４人となりました。半日単位での参加申し込みとしていましたが、多くの方が１日かけて、その日の全講座を聴講してくださいました。様々な分野の学芸員が追求してきたテーマや、これまで講座で語る機会が少なかった保存科学など、興味を持っていただいた講座も多くありました。

また第４回の久喜図書館での出張講座は、夏休みということもあり、子ども対象の講座とし

て開催しました。講座とワークショップを組み合わせ、参加者に大変好評でした。

出張講座　会場：県立久喜図書館
（おばけ図鑑 Part2　ワークショップ）

2　パネル展示「れきみん埼玉を知っていますか」

当館の工事休館についてお知らせするとともに、当館を紹介するパネル展示を実施しました。

工事休館と休館中に実施している事業、博物館を代表する各分野の資料、そして、普段はあまり目にすることのない博物館内部の「仕事」についても紹介する内容としました。

◆パネル展示内容

1　博物館休館中の案内
2　博物館の概要と歴史
3　展示担当の仕事
4　資料調査・活用担当の仕事
5　企画担当の仕事
6　学習支援担当の仕事
7　前川建築の紹介
8　工事休館中の事業
9　博物館の収蔵資料
10　寿能泥炭層遺跡
11　考古資料の紹介
12　歴史資料の紹介
13　民俗資料の紹介
14　美術資料の紹介
15　再開後の見どころ
16　今後の展覧会の紹介

◆実施期間と会場

・3/15（水）～4/14（金）　埼玉県庁
・5/3（水）～5/4（木）　国際友好フェア
・5/16（火）～5/28（日）　久喜図書館
・5/27（土）～7/30（日）　熊谷図書館
・7/19（水）～8/1（火）　久喜図書館
※子ども向けバージョン
・10/2（月）～10/31（火）　埼玉県庁

出張パネル展示　会場：県立熊谷図書館

博物館の休館により、それまで博物館を利用してくださった方々の足が遠のいてしまうこともあります。パネル展示を見て、休館明けにふたたび来館していただく、またこれまで博物館に関心が少なかった人々の来館のきっかけになったのであれば幸いです。

（展示担当　池田伸子）

博物館紹介パネル
左：1　博物館の概要と歴史
右：4　総務・施設担当の仕事

情報発信チームの取組について

当館では、「工事中の博物館ではどんなことをしているの？」といった疑問に答えるべく、工事休館中においても当館の職員の活動や資料のご紹介、工事の様子を積極的に発信するために館内の各担当を横断する「情報発信チーム」を組織して様々な情報発信を行いました。その活動を紹介します。なお、これらのコンテンツは、開館後の現在もお楽しみいただけます。

https://saitama-rekimin.spec.ed.jp/blog/kyukan

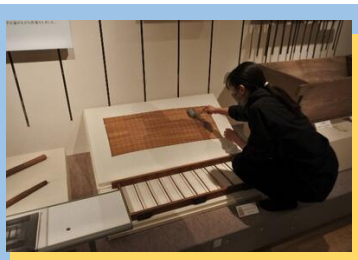
工事休館中は、日頃から公開している職員のブログを強化し、職員の仕事や工事の様子の紹介など、42 回の更新を実施しました。

https://saitama-rekimin.spec.ed.jp/quiz2

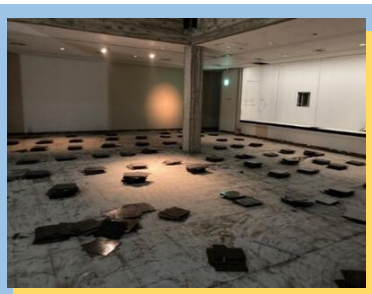
令和２年度、新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館時に、博物館に来館しなくても自宅で楽しめるコンテンツとして実施していた「れきみんクイズ」を復活し、全 47 問を公開しました。クイズは各担当の業務や、学芸員の専門分野から作成しており、大人でも楽しめる難易度となっています。

今日から休館！～博物館改修工事に伴う休館のお知らせ～
【#休館中のお仕事】むかっし一先生、幼稚園に‘火’をお届け！
【#おうちミュージアム】おうちで博物館を楽しもう！
【#休館中のお仕事】撤収！！―資料を運び出すまで―
【#探訪！資料の故郷】箱式石棺が語る埼玉の古墳時代
【#おうちミュージアム】もうすぐ節分！
【#休館中のお仕事】昭和の原っぱ　手押しポンプの修理はじめました！
【#探訪！資料の故郷】皆野町・金崎古墳群大塚３号墳を訪ねる
【#おうちミュージアム】春の気配はすぐそこに…
【#休館中のお仕事】ボランティア研修で八潮市の藍染め工場に行ってきました！
【#おうちミュージアム】出会いと別れの春、そしてお餞別
【#休館中のお仕事】県庁廊下で「出張パネル展示」を開催中！
【#休館中のお仕事】歴史講座 in 秩父神社
【#おうちミュージアム】さくらの花咲く頃
【#休館中のお仕事】学び文庫の蔵書点検をおこないました！
【#休館中のお仕事】県内どこでも！出前授業承ります
【#休館中のお仕事】どうなってるの？大規模改修工事の様子
【#休館中のお仕事】2023 年度のイベントガイド公開中！
【#休館中のお仕事】「季節のミニアート」製作中です！！
【#イベント告知】出張展示 in 深谷「書画から見よう　栄一と惇忠」が始まります！
【#休館中のお仕事】当館職員による昭和の原っぱメンテナンス～手押しポンプ完成編～
【#おうちミュージアム】元気にたくましく⁉　張り子の熊乗り金太郎
【#イベント告知】たまちゃん出張中！
【#埼玉の民俗行事記録】れきみん埼玉ちゃんねるにて公開中！
【#休館中のお仕事】当館職員による昭和の原っぱメンテナンス第2弾！～塀のペンキ塗り～
【#イベント紹介】出張展示・前期の見どころ紹介！
【#休館中のお仕事】当館職員による昭和の原っぱメンテナンス第３弾！～整地作業編～
【#休館中のお仕事】さきたま史跡の博物館で館外ボランティア研修を行いました！
【#休館中のお仕事】国際友好フェアに出展しました！
【#休館中のお仕事】「藍染めハンカチづくり@さきたま史跡の博物館」を開催しました！
【#イベント紹介】出張展示・後期の見どころ紹介！
【#休館中のお仕事】お掃除も頑張ってます～
【#イベント告知】七夕といえば・・・
【#休館中のお仕事】オンライン授業絶賛受付中です！！
【#れきみん埼玉ちゃんねる】「学芸員のイッピン」動画紹介
【#休館中のお仕事】久喜図書館で「出張パネル展示」を開催中！
【#休館中のお仕事】ミュージアム･キャラクターアワードに「てんぐまい三人衆」が参戦！！
【#休館中のお仕事】普段は見られないこんな所
【#れきみん埼玉ちゃんねる】「博物館の楽しみ方を知ろう」動画紹介
【#休館中のお仕事】「まが玉づくり体験」を開催しました！
【#休館中のお仕事】新しい姿に
お待たせしました！～埼玉県立歴史と民俗の博物館再開館のお知らせ～

【工事休館中ブログ 記事見出し一覧（降順）】

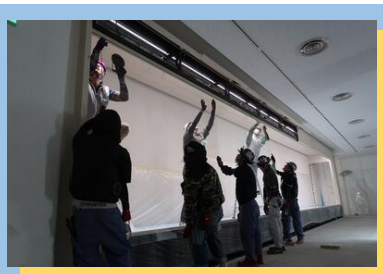


「【#休館中のお仕事】撤収！！
―資料を運び出すまで―」



「【#休館中のお仕事】どうなってるの？
大規模改修工事の様子」

「【#イベント告知】たまちゃん出張中！」



「【#休館中のお仕事】新しい姿に」

○工事休館中ブログ記事紹介○

動画コーナー

https://www.youtube.com/channel/UCHBzPosnXVgF0N7OlfnqlhQ

動画配信サイト Youtube を活用し、「博物館の楽しみ方を知ろう！」、「学芸員のイッピン」、「伝統工芸をみてみよう！」のシリーズを中心に、展示室や資料を紹介する動画を 13 本公開しました。

「博物館の楽しみ方を知ろう！」シリーズは、常設展示を当館の応援キャラクター「たまちゃん」が解説します。博物館に来館しなくても展示資料の一部をご覧いただくことができます。

「学芸員のイッピン」シリーズでは、学芸員イチオシの収蔵資料を、思い思いの方法で５分程度で紹介しています。現在のラインナップは、「皆野町大塚 3 号墳の横穴式石室」、「銘仙」、「黒船来航風俗絵巻」、「くらしをささえた資料たち」、「国宝太刀・短刀」、「鯉亀図」です。

「伝統工芸をみてみよう」シリーズでは、当館のゆめ・体験ひろばで体験できる江戸組紐について、その制作過程を職人さんの実演と解説で紹介しています。

これら公開している Youtube チャンネル「れきみん埼玉ちゃんねる」では、現在の特別展・企画展の紹介動画などを随時更新しています。

『れきみん埼玉』デジタルコンテンツ

https://saitama-rekimin.spec.ed.jp/rekimindigitalcontents

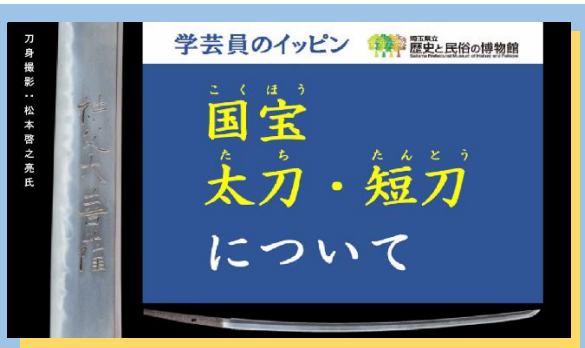
当館の収蔵資料やオリジナルキャラクターの画像を使ったカレンダーやペーパークラフトなど、デジタルコンテンツを作成しました。お手元のパソコンやスマートデバイスにダウンロードし、印刷して自宅で楽しめるようになっています。たとえば、当館が収蔵する鬼の木彫り神楽面や鬼瓦を利用したお面や、資料画像を用いたデザインのポチ袋、ペーパークラフトがあります。なお、当館のオリジナルキャラクターについては、「博物館だより」第 50 号で紹介しています。

上記の各コンテンツの更新にあたっては、都度当館の X（旧 Twitter）での周知、公開ページへのご案内を行いました。

開館した現在は、「スタッフブログ」と「れきみん埼玉ちゃんねる」を中心に情報発信を続けています。工事休館中に多くの職員が動画作成などデジタル媒体の情報発信を経験したため、その実績を生かして今後も情報発信の充実に努めてまいります。

（企画担当　木村遼之）

れきみんクイズは解答選択式



「学芸員のイッピン「国宝太刀・短刀」」では
貴重な刀剣手入れの様子を実況

型紙をダウンロード、印刷して
遊べるペーパークラフト

館内環境整備チームの取組について

館内環境整備チームでは、館内環境の整備等に関する工事休館中の事業として、①図録販売の促進、②案内表示の統一、③常設展示室第６室の玉砂利清掃、の３事業を行いましたので、その取組を紹介します。

1　図録販売の促進

図録の販売を促進するため、図録等の出張販売及び図録ＰＲの強化を行いました。

【図録等の出張販売】

図録等の出張販売は、計３回、渋沢栄一記念館（埼玉県深谷市）で行いました。渋沢栄一記念館では、令和５年４月26日（水）から６月25日（日）までの間、当館の出張展示「書画から見よう　栄一と惇忠」を開催させていただいており、その関連事業である講演会（５月21日（日））及び展示解説（５月13日（土）、６月10日（土））の実施に合わせて出張販売も行いました。

出張販売の様子

販売した図録等は、特別展「青天を衝け～渋沢栄一のまなざし～」（令和３年開催）の図録や栄一さんとたまちゃん（当館の応援キャラクター）のマスキングテープなど。渋沢栄一に関連した図録やグッズをセレクトしたためか、当初想定していた以上に好評をいただきました。

出張販売は初めての試みだったため、試行錯誤の連続でしたが、今回の経験でノウハウを得ることができました。機会があれば、今後も実施を検討したいと思います。

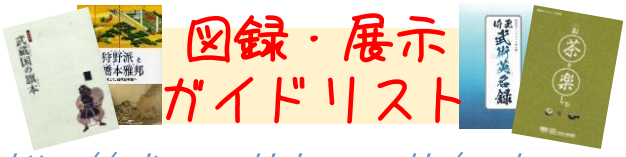
「栄一さんとたまちゃん」マスキングテープ

【図録ＰＲの強化】

販売している図録の魅力をより一層ＰＲするため、当館ホームページ内の図録販売ページをリニューアルしました。

これまでの図録販売ページには、販売している図録の「表紙画像」、「タイトル」、「販売価格」を掲載していましたが、この他に「サイズ・ページ数」、「学芸員による書籍紹介」を追加掲載したことが主な改良点です。

このリニューアルにより、少しだけではありますが、より具体的な図録のイメージをお伝えできるようになったのではないかと思っております。



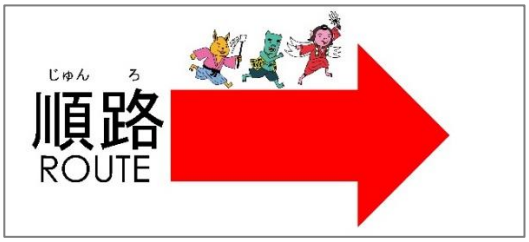
https://saitama-rekimin.spec.ed.jp/zuroku-tenjiguide-list

2　案内表示の統一

館内各所に設置している案内表示（サイン）について、逐次追加されたものが乱立し、統一感がなくなってきていることが課題でした。

そこで、この工事休館を機に、調査研究等を行い、案内表示を作成する際の基本方針を策定しました。基本方針では、案内表示の基本形式（レイアウト、フォント、ふりがなの扱い、多言語化、配色、イラストなど）やよく使う案内表示の雛形を定めています。

今後、この基本方針に基づき、分かりやすく、かつ、博物館のイメージに沿った案内表示を統一的に整備していく予定です。



雛形の例（順路案内）

3　常設展示室第６室の玉砂利清掃

常設展示室第６室に展示している板碑（いたび）や開山塔（かいさんとう）の土台（底面）には、白色の玉砂利が敷かれています。

この玉砂利は、開館中の清掃が難しく、長年の埃や汚れが蓄積していました。見た目が汚いだけでなく、カビ等の温床となる恐れがあるため、この工事休館を活用して清掃しました。

清掃は、周囲に展示資料があることから、水を使用しない（乾燥が十分に行えないため、カビや虫の発生源になりかねない）、資料の影響を与える材料（塗装を溶かす恐れのある溶剤など）は使用しない、虫が付く恐れがあるので屋外には持ち出さない、などの方針を立て、事前に試験清掃を行った上で実施しました。

玉砂利の試験清掃の様子

具体的な手順は、

①長い箒で周囲の資料（板碑や開山塔）から埃を払い落とす。

②玉砂利を取り出し、玉砂利を敷いていた場所を掃除機やアルコールティッシュなどで清掃する。

③取り出した玉砂利は、軍手をした手で揉み洗いする。（玉砂利同士を擦り合わせて汚れを落とす。）

④玉砂利を元の位置に戻す。

といったもので、当館の全職員を動員し、５日間にわたり実施しました。

玉砂利清掃の様子

結果は、「見違えるほどきれいになった！」という人もいれば、「以前と違いが分からない…。」という人も。もちろん館内環境整備チームのメンバーは前者です。（清掃前後の写真がないのが残念です！）

常設展示室第６室を御観覧の際は、板碑や開山塔だけでなく、ぜひ、その足元に敷かれている、きれいになった玉砂利にも目を向けていただけましたら幸いです。

（施設担当　真中博行）

出張ものづくり体験

当館のゆめ・体験ひろばにあるものづくり工房では、様々なものづくり体験をすることができます。大規模改修工事により休館していた昨年の５月～8 月には、工事休館事業としてものづくり工房で体験できる「藍染めハンカチづくり」、「まが玉づくり」、「ミニ絵巻物づくり」を県立の博物館、美術館の計５か所で開催しました。

日　時	5月20日(土)	6月10日(土)	7月23日(日)	8月8日(火)	8月18日(金)
内　容	藍染めハンカチづくり	まが玉づくり	まが玉づくり	絵巻物づくり	絵巻物づくり
会　場	県立さきたま史跡の博物館	県立自然の博物館	県立近代美術館	県立嵐山史跡の博物館	県立文書館
費　用(材料費)	200円	250円	250円	200円	200円

５月 20 日（土）に埼玉県立さきたま史跡の博物館で「藍染めハンカチづくり」を行いました。

埼玉県立さきたま史跡の博物館は「埼玉古墳群」をはじめとした県内の考古資料に関する博物館です。国宝に指定されている「金錯名鉄剣」も展示されています。（現在工事のため休館中）

そんな考古系の博物館で今回行った藍染めは、植物の蓼藍を使った染物の一種で、当館でも洗濯ばさみや割り箸を使った絞り染めの体験をすることができます。

通常、ものづくり工房に大きい甕があるのでそちらで染めてもらうのですが、今回は出張ということで、藍染め担当の職員を中心に藍液を作るところから始めました。

藍液の作成

迎えた当日は、子どもから大人まで 36 名の方に参加していただきました。ハンカチの絞り方として３種類の中から好きなものを選んでもらいました。洗濯ばさみ、割り箸、輪ゴムを使ってハンカチを挟むことで、そこに藍が入らないため、白く模様として残ります。ハンカチの折り方や割り箸の角度によっても模様は変化するため、同じ種類を選んでも全く同じものはできません。そこが絞り染めの面白いところで、参加者の方もそれぞれ自分だけのハンカチを楽しそうに作っていました。

続いて紹介するのは、６月 10 日（土）に埼玉県立自然の博物館、７月 23 日（日）に埼玉県立近代美術館で行った「まが玉づくり」です。

埼玉県立自然の博物館は、自然豊かな長瀞町にある博物館で、埼玉県の自然の歩みを中心とした展示をしています。館の入り口では巨大ザメ「カルカロドンメガロドン」の復元模型がお出迎えしてくれます。

埼玉県立近代美術館は、モネ、ピカソなど海外の巨匠の作品から日本の現代芸術まで多く

の優れた美術作品を所蔵しています。

まが玉は、古代の人の装身具で、古くは縄文時代から身に着けていたと考えられています。はじめは動物の骨や牙で作られていましたが、ヒスイやメノウなどの石を使ったまが玉が作られるようになったとの説があります。当館では、滑石という柔らかい石を3種類のやすりを使って削っていきます。

形ができてきたら目の細かいやすりで傷取りと磨きの作業をして、最後に紐をつけて完成です。2日間の開催で付き添いの方も含め70名の方に参加していただきました。参加者の方からは、自分のオリジナルまが玉が作れて楽しかったと好評でした。

8月8日(火)は埼玉県立嵐山史跡の博物館、8月18日（金）には、埼玉県立文書館で「ミニ絵巻物づくり」を行いました。

埼玉県立嵐山史跡の博物館は、国指定史跡「比企城館跡群」の一つである「菅谷館跡」の中にある博物館で、比企地域の城館跡や中世石造物を展示しています。菅谷館の主畠山重忠のロボットがお出迎えしてくれます。

埼玉県立文書館は、埼玉県の中近世から近現代までの文書、地図や写真など130万点以上の資料を収蔵しています。

絵巻物は、情景や物語などを連続した紙にあらわしたもので、日本では平安時代に盛んに作られるようになりました。『鳥獣人物戯画』や、『源氏物語絵巻』などが有名ですが、当館で絵巻物と言えば『太平記絵巻』です。南北朝時代の動乱を描いた『太平記』を色鮮やかな絵と文章で仕上げたこちらの絵巻物は、全12巻からなり、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーで2巻、国立歴史民俗博物館に3巻、そして当館は最多の5巻を所蔵しています。

「ミニ絵巻物づくり」は、紙をのりで貼り合わせ、竹ひごや木の軸をボンドでつけて作成していきます。貼り付け終わったら、色鉛筆、カーボン紙、太平記絵巻に登場する人物のスタンプなどを使って自由に絵を描いて絵巻物を完成させていきます。

スタンプを使って戦いの場面を描いたり、自分の好きなものを描いたりと、自分なりの絵巻物を作っていました。こちらは付き添いの方を含めて2日間合計86名の方に参加していただきました。

今回当館と同じさいたま市から長瀞町まで各地の県立館でものづくり体験を楽しんでもらうことができました。休館中の事業ではありましたが、これまで当館を知らなかった方にも知ってもらう良い機会にすることができたと思います。工事休館も終わり、出張ものづくり体験で行った「藍染めハンカチづくり」、「まが玉づくり」、「ミニ絵巻物づくり」は休館日をのぞき当館で毎日体験することができます。他にも「江戸組紐ストラップづくり」や「浮世絵スリスリ」など様々な通常体験メニューがありますので、当館を訪れた際はぜひ体験してみてください。　　（学習支援担当 原綾音）

出張展示 in 深谷
書画から見よう 栄一と惇忠
実施報告

休館中の取り組みとして、令和５年４月 26 日（水）から６月 25 日（日）にかけ、深谷市の渋沢栄一記念館で、出張展示を開催しました。渋沢栄一記念館と協力・連携し、深谷市ゆかりの渋沢栄一と尾高惇忠について、彼らに関する書画からその人となりや交流関係を紹介しました。本展は、「惇忠と書画」「栄一と書画」「文化交流と平和」の３部構成で、前・後期展示替を行い、会期中 25 点の作品を展示しました。

展示室（前期展示）

61 日間の会期中、14,956 名の方にお越しいただきました。また、会期中の関連事業にも、大変多くの方にご参加いただきました。

５月 21 日（日）の講演会では、「栄一と惇忠をめぐる美術」という演題で、渋沢栄一の芸術家への支援や、尾高惇忠による絵画収集について取り上げました。

５月 13 日（土）、６月 10 日（土）には、展示室で出張展示の見どころを解説しました。

展示解説

関連事業の実施日には、当館の図録やミュージアムグッズなどの出張販売を行いました。

出張販売

「出張展示見どころ動画」

出張展示では、答礼人形「秩父嶺玉子」（復元、当館蔵）を展示しました。渋沢栄一が命名した「秩父嶺玉子」は、日米人形交流事業で作られた人形です。昭和２年（1927）、日米関係が悪化する中、渋沢栄一はギューリック博士とともに日米人形交流事業を主導しました。アメリカから日本へ贈られた友情人形（通称・青い目の人形）のお礼として、日本からアメリカへ贈られた答礼人形 58 体のうち、埼玉県代表が秩父嶺玉子です。この人形は、当館の応援キャラクター「たまちゃん」のモデルになっています。

会期中に「たまちゃん」が渋沢栄一記念館の出張展示を見に行くというコンセプトで動画を作成し、Youtube や展示会場などで公開しました（現在は会期が終了したため非公開）。

渋沢栄一の肖像が使用される新一万円札は、７月３日に発行されます。来年度、当館は渋沢栄一に関する展示を計画中です。皆様のご来館をお待ちしております。　（展示担当　井上海）

常設展示室第 10 室のリニューアルについて
－くらしを伝える資料の展示－

当館の常設展示室は、埼玉県の歴史を通史的に紹介しています。第 1 室から第 9 室までは、原始、古代、中世、美術工芸、近世、近現代を対象に展示しています。最後の第 10 室は民俗展示室といい、当館の名前「埼玉県立歴史と民俗の博物館」にも登場する「民俗」をテーマとした展示室です。

民俗展示室では、県内に伝えられてきた行事や技術、生活の姿を取り上げています。私たちの身近な歴史や文化について、実際にくらしで使われてきた道具などの民俗資料の展示をとおして紹介します。

この民俗展示室は、数年に一度、全面的な展示替えをしています。当館は、国指定重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」1,604 点を含め、約 7 万点の民俗資料を所蔵しています。質・量ともに充実している民俗資料を有効に活用し、県民の民俗文化財に対する理解を深めるため、定期的に展示替えを実施しています。他の常設展示室でも、資料保存の必要や季節の展示にあわせて展示を替えていますが、民俗展示室の場合は展示テーマを変えて、展示資料も一新する部屋全体のリニューアルを行っています。

「水とくらし」をテーマとした展示が令和 4 年に終了し、博物館の再開館と同時に、新しい展示が始まりました。リニューアルした民俗展示室のテーマは「火とくらし」です。

人々は火を使うことで、くらしをより豊かなものにしました。火は恩恵をもたらす一方で、時には日常を脅かす存在でもありました。それゆえに火を敬い恐れ、信仰や言い伝えを生んできました。火が登場する祭り行事や火に関する風習からは、人々の火へのまなざしを見ることができます。県内のくらしを「山・里・都市」に区分し、地域のくらしをはじめ、伝統的な技、祭りや行事に関する資料から、それぞれのくらしと火とのかかわりを展示しています。

さて、民俗展示室を訪れたことのある方は、展示室の入口にある模型について覚えていらっしゃるでしょうか。「山・里・都市」の各地域のくらしを象徴する住まいの模型を展示しています。今回の展示では、模型と展示の構成を関連付けることで、展示の導入として模型を活用しました。それぞれのくらしを知る手がかりとして、模型にもぜひご注目ください。また、各展示ステージの壁面上部には、章ごとに模型の地域と同色の帯をつけています。章の区分が分かるように工夫しました。

民俗展示室

導入の模型

博物館の展示は、資料をとおして歴史や文化を見るため、かたちのあるものが必要です。火とくらしでは、炭焼きや鍛冶などの火を活かした産業の道具や、照明や暖房をはじめとしたく

らしの道具、夏の虫追いや盆といった火が登場する行事の道具などの資料が見られます。

火が登場する行事は、燃やすという特性から使われる道具などは燃えてなくなり、終了後にものが残らないことがあります。今回、「北川崎の虫追い」（県指定無形民俗文化財）の展示にあたり、地域から虫追いで使う松明を提供していただきました。ここでは、虫追いの松明作りを中心に行事の今昔について少しご紹介します。

北川崎の虫追い（令和５年）

越谷市北川崎では、毎年７月 24 日に虫追い行事が行われています。麦わらでできた松明に火を灯し、あぜ道を行進しながら稲につく害虫を追い払い、豊作を祈ります。

行事で使う松明の製作は、例年７月の第一土曜日に川崎神社（越谷市）で行われています。松明の材料には、麦わらと竹、縄が使われます。麦は他地域で栽培され、その年の春に北川崎の人たちが収穫し、神社へ運び、乾燥させて使います。竹は火をつけた時の安全性から、10 年ほど乾燥させたものを使っています。令和５年の松明作りでは、自治会や地域の小学生によって、約 100 本の松明が作られました。

松明は、竹を軸にその周りに麦わらを束ねて縄で固定する作業を繰り返して作ります。7 回ほど繰り返すと、全長約 2ｍの松明が完成します。麦わらを束ねる縄は、行事の最後に松明をおたきあげする際に解くため、松明の行進中は解けないように固定でき、かつ解くときは容易に解けるように、工夫した結び方をします。

平成初期頃までは、北川崎で稲作の二毛作として麦作が行われていました。各々が収穫した麦を使って家で松明を作り、行事の前日に神社へ運んでいました。どの家よりも大きい松明を作ろうと、5ｍを超える松明が作られることもありました。現在では、行事に参加する子どもが安全に持てるように、主に 2～3ｍの大きさの松明が作られています。

松明作り（令和５年）

農家で作られた松明（昭和 53 年）

現在の松明の大きさでは、川崎神社を出発し、行進の終着点である平新堀（ひらしんぼり）に行くまでの間に燃え尽きてしまいます。そのため、最初の１本が終わると、虫追いの順路内にあらかじめ運んでおいた松明を使って再び行進します。４～５ｍの大きさの松明を使っていた頃は、最後まで１本の松明で行進が行われていました。終着点に到着すると、松明のおたきあげをします。

さて、展示にあたり新たに松明をいただきましたが、実は当館所蔵の資料には同じく北川崎からいただいた松明があります。昭和 57 年に作

終着点で行われるおたきあげ（令和５年）

られたもので、全長は3.6ｍの大きさです。この松明は、国指定重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」のうちの１点です。「北武蔵の農具」は、農具のほか、農具製作用具、農耕儀礼や信仰に関する用具を含み、地域の特色を示す貴重な資料です。

博物館では歴史や文化を次代へと残すため、資料を収集・保存しています。資料が使われていた様子を伝えるために、展示の仕方には工夫が求められます。松明の展示は、立てかけた松明をマネキンが抱えることで、実際に行事で使われるときと同じ状況の再現を試みました。長期に及んで立てて展示するため、文化財の松明は展示を控え、展示には新たな松明をご提供いただきました。これは、現在も地域で行事が続けられているからこそできることです。

松明の展示

民俗展示室の資料は、少し昔のくらしで実際に使われていた道具や、今も使われている道具が多くあります。見る人によって、さまざまな背景があるかもしれません。民俗の展示がくらしの文化について考えるきっかけになると幸いです。民俗展示室にぜひ足をお運びください。

【むかしのくらしを更新！】

むかしのくらしは、民俗展示室内にある小学校の社会科見学を対象とした展示コーナーです。しかしながら、小学生には解説文が難しかったり、一般の来館者には展示の意図が伝わらなかったりと、展示に課題がありました。今回、展示リニューアルにあわせて、むかしのくらしの更新を行いました。

主な更新内容は、パネルやキャプションの変更です。資料と名称が一致するように、各資料には資料名を大きく記したキャプションを配置しました。道具の使い方に関する解説は、衣食住のテーマごとに説明したパネルをコーナー手前の見やすい位置に設置しています。解説と資料が関連したものと分かるように、キャプションとパネルにはテーマごとに共通のアイコン画像を入れています。

この他にも、コーナーの壁面に「むかしのくらし」と記したバナーを新設しました。これにより、大テーマ「火とくらし」と小学校の学習向けの展示を区別できるようになりました。

むかしのくらし

（展示担当 佐藤夏美）

常設展示室第１・２室
特集展示新設・パネル更新について

≪常設展示室第１室≫

常設展示室第１室では、「狩りから稲作へ」とテーマを掲げ、約１万 5000 年前の旧石器時代から約 1700 年前の弥生時代までをご紹介しています。特に縄文時代の展示では、当館から約 1km のところに位置する寿能泥炭層遺跡から出土した土器、石器、漆製品、木製品など多数の資料を展示しています。ジオラマを含め、展示資料と対応したケースが多く、新たに展示替えを行うのが難しい作りとなっていました。今回のリニューアルでは、定期的に展示替えを行う特集展示のコーナーを新規に設置しました。また、現在は”海なし県”として知られる埼玉県ですが、縄文時代には海が間近に迫っていました。県内にも貝塚が多くつくられ、そのうち４か所は国指定史跡に指定されています。埼玉の四大貝塚をご紹介するパネルを設置しました。大きくリニューアルした 2 つのコーナーについて、ご紹介します。

≪考古特集展示コーナー≫

展示室に入ってすぐ右手の行燈ケース１つと、部屋の中央部壁際に新規に設置した２つのケースを特集展示コーナーとしました。もともとは寿能泥炭層遺跡から出土した珪藻（けいそう）を顕微鏡で観察する展示コーナーで、遺跡の形成過程や環境変化を紹介していました。展示機器の老朽化や新型コロナウイルス感染症拡大による使用停止を受け、新たな展示スペースとしてリニューアルしました。

第１弾の考古特集展示のテーマは「埼玉の縄文新発見！」（会期：令和５年 10 月 14 日（土）～令和６年７月７日（日））です。県内の縄文遺跡の調査研究の成果として２遺跡をご紹介しています。

川口市宮合（みやあい）貝塚では、これまでの発掘調査の結果、縄文時代後晩期を中心とした建物跡や遺物が多数見つかっています。平成 26･27 年度に発掘調査され、令和５年に報告された第 13 次と第 14 次調査の出土資料の一部を展示しています。縄文時代後晩期には、文様装飾が豪華な精製土器と、文様が簡素な煮炊き用の粗製土器があります。宮合貝塚からは、本来精製土器の文様が施されるはずの注口土器に粗製土器と同じ文様が施文されたものが出土しています。また、実用的な深鉢形土器と同じ文様が施文された土版が見つかりました。縄文土器や土版などの土製品の作り手について考えるヒントを与えてくれる資料です。

飯能市加能里（かのり）遺跡では、これまでの発掘調査で、縄文時代の草創期から晩期まで、長きにわたって人々が生活していたことが分かっています。今回は、縄文時代中期から晩期にかけての土製品を中心にご紹介しています。土偶や土製耳飾のほか、サルやイノシシをかたどった動物形土製品も３点出土しています。サル形土製品は左前脚以外は欠損していますが、つぶらな 2 つの目と穴まで表現された鼻、上向きにちょこんと表現された尻尾は愛嬌があります。加能

リニューアル前の第１室のようす

リニューアル後の第１室のようす

川口市宮合貝塚の展示

飯能市加能里遺跡の展示

里遺跡の縄文人にとって、サルやイノシシは身近で、かつ土製品に表現するほど重要な動物だったのでしょう。

次の特集展示は、「埼玉の縄文集落」（会期：令和６年７月９日（火）～令和７年７月13日（日））の予定です。

≪「貝塚は語る」コーナー≫

貝塚の剥ぎ取り標本の上位に展開するパネル展示コーナーです。もともと縄文海進と貝塚を紹介する「貝塚は語る」と、縄文時代の住居跡などを紹介する「竪穴のすまい」という小テーマを掲げた展示でした。リニューアル後は、貝塚の紹介をメインとして、今では”海なし県”といわれる埼玉県にも海があったということをアピールしています。

埼玉県内には国指定史跡に指定された貝塚が４か所あります。富士見市水子（みずこ）貝塚、さいたま市真福寺（しんぷくじ）貝塚、蓮田市黒浜（くろはま）貝塚、春日部市神明（しんめい）貝塚です。水子貝塚と黒浜貝塚は公園として整備され、休日には市民の憩いの場となっています。

貝塚は、使わなくなった道具類や食べたあとの貝殻や骨などを一定期間同じ場所に捨てることで形成されます。日本の土壌は酸性のため、貝殻や骨などは溶けてしまい通常は残りませんが、貝の炭酸カルシウムがアルカリ性を保つことで溶けずに残ります。貝塚から見つかる貝の種類を調べることで、周辺の環境を推測することができるのが、貝塚の魅力の一つです。

最も海が内陸まで迫ってきた縄文時代前期（約7000年前）に形成された黒浜貝塚は、暖かい海に棲むハイガイなどを多く利用していました。一方、同じ縄文時代前期に形成された水子貝塚では、淡水と海水が混じりあう汽水域に棲むヤマトシジミを多く利用していました。水子貝塚の近くには汽水域があったのでしょう。また、縄文時代後期（約3000年前）に形成された真福寺貝塚や神明貝塚ではヤマトシジミが多く利用されていました。縄文時代後期には海水面が下がり海が退いたため、周囲には汽水域が広がっていたのでしょう。縄文時代の埼玉の”海”を想像してみてください。

（展示担当　別所　鮎実）

四大貝塚を紹介するパネル

≪常設展示室第１室≫

リニューアル前の常設展示室２室では、古墳時代のカマドや鉄製の農具の導入などの生活文化の変化や、武蔵武士につながる王権の軍事的基盤としての東国の萌芽という二つのテーマで古墳時代を紹介してきました。

このため、前方後円墳をはじめとする巨大な墳墓が列島各地で約 300 年間にわたってつくられるという時代の特性がわかりにくかったと思われます。

また、古墳時代の東国はヤマト王権の影響を受ける地域とされることも多かったわけですが、各地で古墳や集落遺跡の調査が進み、古墳の築造にあたっての地域の主体性や独自性も決して無視できるものではなくなっています。

埼玉県域においても前回の常設展示が構成された昭和 58 年（1983）以降、古墳や集落遺跡の調査が進み、地域の特質も明らかになってきました。そこで新たに２つのテーマを設定しました。一つ目は「古墳の出現と交流」、二つ目は「王権の伸長と東国」です。時間的には「古墳の出現と交流」は古墳時代前期から中期の前半を中心とする時期、二つ目は埼玉古墳群出現以降の中期後半から古墳の消滅までの時期を扱っています。

古墳の出現と交流　今日、各地における古墳の出現は、ヤマト王権の影響という説明だけでは不十分です。地域ごと要因は様々ですが、東日本においては当該期における環境変動とそれに伴う、人や情報、ものの移動とそれをめぐる地域の駆け引きが古墳出現の背景として想定されます。埼玉県域でもこの時期には東海、北陸地域など他地域の特徴をもつ土器がみられ、交流が活発だったことがわかります。展示では様々な地域の特徴の土器を展示しています。

古墳の出現と比企・児玉　県内で古墳が早くに出現するのは東松山市・吉見町を中心とする比企地域と、本庄市、美里町を中心とする児玉地域です。この地域では他地域の特徴をもつ土器も多量に出土しています。両地域とも前方後方形周溝墓が出現し、そののち前方後方墳、そして前方後円墳の順で出現します。他地域の特徴の土器には東海系の土器も目立ち、前方後方形周溝墓と前方後方墳の多い東海地域との関係も注目されます。

埼玉の玉作り　埼玉県域の古墳時代史を語るうえで反町遺跡、前原遺跡の玉作り工房の発見は重要です。特に注目されるのは、現在の荒川低地をのぞむように立地する２つの遺跡で、水晶製勾玉の生産をおこなっていたことです。この段階の水晶製玉作の生産は全国的にみても古い事例です。玉作に用いられた水晶の原産地は山梨県甲府市周辺とみられており、遠隔地から運ばれた水晶で勾玉が生産されていたものとみられます。反町遺跡の位置する比企地域は出現期の古墳も多い地域であり、前原遺跡の近くには熊野神社古墳が築かれます。荒川低地を中心としたこの地域が玉作りにおいても交流の舞台となったことがうかがえます。

近年の調査成果を盛り込んで新装なった２室で埼玉県域の古墳時代についての理解を深めていただきたく思います。

（展示担当　片山健太郎）

リニューアルした２室

埼玉の玉作りの展示

資料の保存環境の改善について

博物館の役割のひとつに資料の保存、そして、次世代への継承があります。資料を少しでも良い状態で保存していくために重要なことは、その周囲の環境を整えてあげることです。周囲の環境の要素には、温湿度や光、空気環境などがあります。それぞれの資料には適した環境があり、不適切な環境に置くと劣化が進んでしまいます。

当館でも開館当初から環境を整えるよう努めてきましたが、やはり施設、設備の老朽化で改善が必要な箇所も出てきました。そこで令和４年１２月５日から行った施設改修工事では空調の設備更新など、資料の保存のための工事も行いました。その一部分をご紹介します。

○新しくなった展示ケース

新しく作り替えたのは常設展示室第３室と特別展示室の壁に固定されているケース（ウォールケース）です。

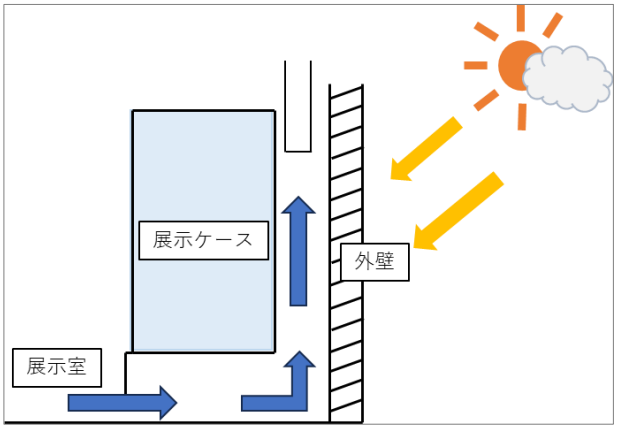
まず特別展示室のウォールケースには空調機が設置されています。今回の工事では、展示する資料に、より配慮した空気の流れになるように改善しました。わかりやすい例として、掛け軸等の吊るす資料の場合、資料に直接風が当たってしまうと揺れてしまい、資料の損傷に繋がります。

特別展示室の新ウォールケース

そうならないように空調から出る空気の流れが壁側ではなく、ガラス側を通るように、かつ、ウォールケースの中の温湿度が一定になるように調整しています。その他にも、ウォールケースは博物館の外壁に面していますので、外の気温の変化を大きく受けないように、展示室の空気をウォールケースと外壁の間に通す工夫もされました。

次に常設展示室第３室ですが、こちらは空調を設置していない非空調型のエアタイト（密閉）ケースです。そのため、ケース内の温湿度は展示室のそれに依存しています。今回の工事ではウォールケースの温湿度を安定させるために、特別展示室と同じく、展示室内の空気がウォールケースと壁の間を通るよう設計されました。

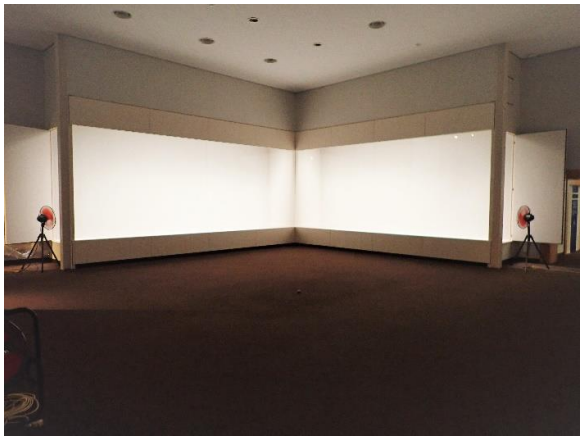
また、展示台の下の部分に空気清浄装置が組み込まれました。こちらは、調湿ボックスと呼ばれる調湿剤を入れる箱がウォールケースの下の部分にあるのですが、そのボックスに付属するように設置されています。この装置をつけることによって効率よく調湿した空気がウォールケース内に行きわたるようになっています。さらに、その装置にガス吸着フィルターを取り付けることによって、資料に有害なガスも取り除いてくれます。



ケースと外壁の間に展示室の空気を通す（模式図）
外気温度の影響で展示ケースの温湿度に変化を及ぼすのを防ぐ。

○常設展示室の温湿度改善

当館の常設展示室は 1 階と地階にあります。工事以前は常設展示室の全部屋を一括で空調していました。そのため、夏場は地階の湿度が上がってしまい、除湿器を稼働させていました。特に第 7 室は他の部屋に比べ、部屋が狭く、空気の循環も悪い状態でした。そこで、1 階部分と地階の第 7 室、第 8～10 室に分けて、空調できるように工事を行いました。これにより、きめ細かく、より適切な温湿度管理ができるようになることが期待されます。



常設展示室第 3 室の新ウォールケース
施工後に風を送り、枯らしをしている。

○収蔵庫での工事

・空調設備の更新

当館の収蔵庫は 2004（平成 16）年に空調機を設置しました。それから今日まで 24 時間約 360 日（作業上、停止している日もありました）働き続けてくれました。しかし、設置から 18 年を経過し、老朽化が進んでいましたので、新しい空調機に更新しました。

工事が始まる前に、空調時の気流や温湿度のムラを測定し、気流が強い箇所や、他より温度が高くなっている箇所等を洗い出しました。そのデータを参照し、新しい空調機を設置した際には、ムラがなくなるよう風量や気流を調整しました。

・消火設備の更新

当館では館内各所に消火栓がありますが、収蔵庫にはガス消火設備を設置しています。水を使わないのは、水に濡れると変形してしまったり、カビが生えてしまったり、資料を損なう恐れがあるからです。

工事前までの消火ガスは、二酸化炭素を使用していました。消火ボンベ室には 100 本以上の二酸化炭素ボンベがありました。しかし、二酸化炭素だと、もし誤発動した場合、収蔵庫内に人がいると大変危険です。そこで今回の工事では、ハロゲン化物の一種のハロン 1301 に変更しました。ハロゲン化物は熱がない状態だと人体に無害です（ただし、酸素濃度が低くなるため注意は必要です）。ほかの消火設備ですと窒素ガス消火設備がありますが、必要とするボンベの数が多くなってしまい、当館のボンベ庫では入りきれないため、今回の工事では、ハロゲン化物消火設備を取り入れることとなりました。

・照明の LED 化

工事前は美術館・博物館用蛍光灯を使用していましたが、蛍光灯の生産の終了が見込まれることや、省エネにつながることから、第 1 収蔵庫は LED 照明にしました。調光式となっており、部分的に薄暗くすることができます。

収蔵庫内の LED 照明

当館は開館してから 52 年が過ぎました。建物や設備の老朽化は避けられないものです。整備は欠かさずしていますが、機械等には耐用年数もあります。資料の保存のためにも悪くなっている箇所をきちんと把握し、新しくするという対応も必要となってきます。

（資料調査・活用担当 濱田翠）

昭和の原っぱメンテナンス

「昭和の原っぱ」は、当館のゆめ・体験ひろばにある無料の屋外スペースです。昭和30〜40年代の雰囲気を再現しており、ベーゴマやフラフープ、けん玉などの昔の遊びを通して昭和の雰囲気を味わうことができます。

そんな昭和の原っぱですが、経年劣化により修繕が必要な個所が多くありました。そこで、大規模改修工事により休館していた時期に職員で原っぱのメンテナンスを行いました。

最初に行ったのは手押しポンプの修理です。手押しポンプは手でハンドルを押すことで水を吸い上げる道具で、明治時代に全国に広まりました。水道がなかった時代、井戸から水をくむのに使われました。当館の手押しポンプは残念ながら井戸ではありませんが、当時の水くみを体験することができます。

そんな手押しポンプですが、当館休館前にポンプと木製の板との接合部から水漏れを起こしていることが判明しました。さらに木製の蓋部分も古くなっていたため、板と蓋は新しいものにすることにしました。

まずはポンプを外してさび取りから。数十年分のさびが付いていたのでこの作業はとても根気のいるものでした…。

さびが落とせたら次はさび止め液を塗っていきます。さび止め液を塗った後、緑色のペンキでポンプを塗っていきます。緑が映える素敵なポンプに！ポンプの中にある木玉も劣化していてなかなか水を吸い上げてくれなかったため、ゴム製のものに取り換えました。

お次は木製の板と蓋づくりです。まずは木材に防腐剤を塗るところからスタートしました。

塗って乾かしてを数回繰り返した後、組み立てて色を塗っていきます。

最後に取り付け作業を行うと…

きれいな手押しポンプに生まれ変わりました！開館後、子どもから大人まで多くの方が体験しています。お水の出も順調です。

手押しポンプの修理後に取り掛かったのは塀と駄菓子小屋のペンキ塗りです。「昭和の原っぱ」は木製の塀に囲まれた作りになっていて、昭和レトロな看板や木製の電柱があります。しかし、塀はコケや汚れが目立っており、看板より汚れに目が行ってしまっていました。

同じく原っぱ内にある駄菓子屋コーナーには、駄菓子をはじめ昭和の子どもたちが夢中になったすごろく、おはじきやめんこなどが展示されています。

しかし、こちらも色が剥げて汚れが目立っていました。そこで、塀と駄菓子小屋のペンキ塗りを開始しました。ペンキを塗る前に高圧洗浄機などでコケや汚れを落としていきます。その後、刷毛を使って塀を塗っていきます。少し青みがかったように見えますが、時間がたって乾くと色がなじんでいきます。

ペンキが乾いてきたら再度塗るという作業を数回繰り返していきます。

改修前

改修後

写真で見ると繊細な違いなのですが、きれいな塀と駄菓子小屋に生まれ変わりました！

いよいよ最後のメンテナンス、それは原っぱの整地作業です。先ほどの駄菓子小屋が設置されている原っぱはコンクリートでできていたのですが、コンクリートがはがれてボロボロになっていました。

改修前

子どもたちが転んでしまう恐れもあったため、こちらも修理を開始しました。水で固まる防草砂というものを使って整地作業を行いました。まず原っぱを棒を使って区分けし、部分ごとに砂をかけ、水を撒いていきます。一度目の水まきの後、約１時間後に再度水をかけて固めていきます。

改修後

こちらは写真で見ても見違えるほどきれいに生まれ変わりました！原っぱがきれいになり、現在は学校団体や当館で毎年行われているベーゴマ大会の際に安心して使えるようになりました。当館を訪れた際にはぜひ生まれ変わった昭和の原っぱもお立ち寄りいただけると嬉しいです。　　（学習支援担当　原綾音）